

原雙桂の温泉小言

京都伊藤東涯の門下に名あつた儒者で、寶曆の頃唐津侯に仕へた原雙桂の温泉小言は温泉考と題して寛政六年版本となつた温泉の入浴者には今も心得になるから挿入する。(如舟)

……温泉もその沸出る土中の水筋湯筋銅鐵銀鉛礬石丹砂礬石砒石などの一切の異氣をうけず異氣にそまらずして、自然天然陰陽交會水火妙合のうぶのまゝにて、その上に純陽硫黃の氣と太陰黃土の精とをあわせ帶て沸出る温泉是を極上々の良湯とす故に或は鐵漿の臭氣をなしその外種々の異臭あるはよろしからず。臭はただ硫黃の氣あるをよしとす。それもあまり甚しきにすぎるとはこのまざることなり。又その味或は苦く或は酸く或はしぶく種々の異味あるは甚あし。その内しぶきと酸きとは別而あし。左様の味の湯はかならず小瘡ひぜんかきなんはかさ梅瘡の類の出来物を裏へおひこみて愈すものなり。かならずその湯に浴すべからず。是最下の毒湯なり。味はただ白湯をのむひさしきをよしとす。又すこし鹽けのあるもよし。ここの外鹽つよくにがりを味ふに似たるは又このまざることなり。又その色或は黒く或は赤或は青く異色なるはよろしからず。色はただ潔白水のごときをよしとす。或は又すこし黄色を帶るもよし。是も亦黄色にすぎてもろくとするほざるはこのまざることなり。

故に諸國の温泉ある所一所に湯壺のいくつもある所あり。土地がひとつ所なりとてその湯に差別なしとおもふべからず。湯

壺湯壺と相去ること幾か二三間のあいだにて、その湯の性大に相違するあり。是そのわかす地中の火はおなじ火なれ共其湯となる水筋の相違或は又土中にすでに湯となりて後その湯のくぐり来るすぢに相違ある故なり。肥前温泉山の上に湯壺いくつもあり。その湯壺の相去ること幾か四五間或は八九間のあいだなり。幾か見へ渡る程の所のさぢゆへにその湯に差別あるまじきことなるに、その湯の色米のさぢ汁を見るがごとく白湯あり、又青黒色なるあり砥汁のごときあり、その湯皆極熱にして人の浴すべき湯にあらず。土人これを名づけて地獄といふ。浴せぬゆへにその性教はしれぬとも、色さへかくのごとく大相違あるなればその性の相違は決定なり。是湯壺の所の土氣に相違もなく沸す地中の火に相違もなき筈なれども、その湯壺々々水筋の相違或は土中にて湯となりて後その湯のくぐり来る筋々に相違ある故にかくのごとく色に相違あり。但州城崎の温泉も新湯と瘡湯と其のあはひ幾かの所なれ共、新湯は瘡を發し瘡湯は瘡をいやす。曼陀羅湯は東槽は瘡を發し西湯は瘡を癒す。これも右の理とおなじことにて、その湯壺々々へ来る湯の筋筋ちがふゆへなり、わかつ火に相違あるにあらず。

一、さて温泉のあまり熱きはよろしからず。又ぬるきはもとよりよろからず。ただ溫柔和煦なるをよしとす。香川太冲の説に温泉は極熱のものをよしとす、極熱の熱勢人の元氣を助け元氣を振興し沈痾を起し癰疽を發すといへるは笑ふべきもの甚しきなり。……………温泉の能毒のわかるゝはあつきぬるきによることにあらず。湯筋の差別によることなり。故に極熱の湯にも寒冷の性をそなへし温泉あるべし。煎湯は熱湯にても石膏の煎湯は寒性なるがごとし。又さまで極熱にてなく其外の物にそますた純陽硫黄の氣ばかりを土中にて觸そゝぎて出來たる温泉なれば、その性温にしてよろしかるべし。故に温泉をみらぶはただ異氣に染むるをまらぬかをさくさ吟味し、自然天然のうぶのまゝなる水筋の湯硫黄の氣ばかりにふれそゝぎて出來る湯のあつからずぬるからず身にふれて溫柔和煦既に浴して後腹臍皮膚表裏内外煦々温暖のやゝしばしやまざる湯を極上々の良湯とおもふべきなり。筑前の巨原篤信も熱湯には浴すべからず

昔の熱海間歇温泉

日本の温泉で歴史上に有名なのは有馬熊野道後の三で、道後の温泉の碑は滅びても銘文は殘つてゐる。此等は何れも大和の朝廷に近いので

温なるをよしとすといへり。此ことばよしとすべし。

一、筑前の國三笠の郡天拜山の麓に温泉あり。村の名を武藏といふ。その温泉まことに右の注文のごとく異氣に觸れず。異臭異味を帯びず。自然天然のまゝなる湯のただ硫黄の臭氣を帯びてあつからず、身にふれて溫柔和煦既に浴して後腹臍皮膚表裏内外煦々温暖の氣やゝしばしやます。頗に浴すれども皮膚枯燥せず。疥癬梅毒一切の諸瘡ある人これに浴すれば皆邪毒を排出し瘡汁を托發し諸瘡ことの外わかやきたちて、扱は九日乃至二七日三七日の以後味よく平癒す。實に最上至極の良湯なり。それゆへ入湯の人も近國よりあまたあり。温泉の理に達せざる人は兎や角やと評論もつけ有馬などの湯よりは格別おそろたる様におもふべけれども左にはあらず。世人ただ耳を貸んで目はいやしめ、遠きをしたひて近きをゆるかせにす、これその常なり淺間といふべし。

あるが、伊豆の温泉では伊豆山社と共に走り湯の名のみが古く知れて風土記逸文にも見えてゐる。熱海の方は鎌倉幕府の出來て關東が開けた